

2. 水稻品種「にこまる」の岡山県南部における移植晩限

[要約]

水稻品種「にこまる」の移植晩限は6月下旬であり、7月上旬以降の移植で玄米外観品質が低下する。7月中旬以降の移植では減収し、減収程度は疎植で顕著である。

[担当] 岡山県農林水産総合センター農業研究所 作物・経営研究室

[連絡先] 電話086-955-0275

[分類] 情報

[背景・ねらい]

「にこまる」は高温登熟耐性が高く、「ヒノヒカリ」に代わる品種として県南を中心とした栽培に適する。一方、県南平野部の大規模稲作では、作期分散による移植期間中の労働時間の平準化や省力化が望まれており、特に麦作や水利慣行を考慮すると早期移植より遅植えのニーズもあることから、「にこまる」の移植晩限を明らかにする。

[成果の内容・特徴]

1. 7月中旬以降に慣行の栽植密度（18.5株/㎡）で移植した場合、総収数と登熟歩合が低下するため、収量は減少する（図1）。
2. 7月上旬以降に移植した場合、玄米粒が充実不足となり整粒歩合と検査等級が低下する（図2、3）。
3. 疎植（11.1株/㎡）で移植した場合、減収する時期と玄米外観品質の低下する時期は慣行の栽植密度と同様であるが（図4）、特に疎植では減収程度と玄米外観品質の低下程度が大きい。

[成果の活用面・留意点]

1. 「にこまる」の栽培適地である県南部に適応する。
2. 移植時期が遅くなるほど登熟期間が長くなるため、早刈りにならないように注意する。

[具体的データ]

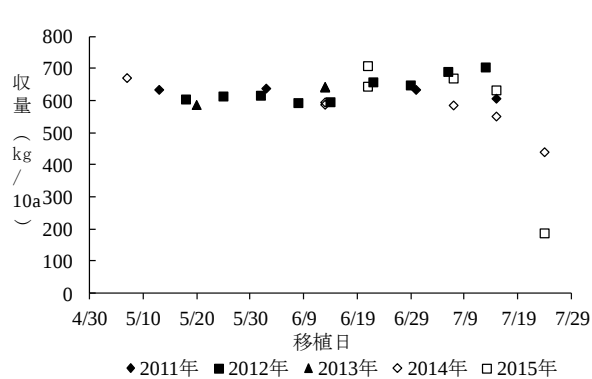


図1 移植日毎の収量

注) 栽植密度は全て 18.5 株/m²

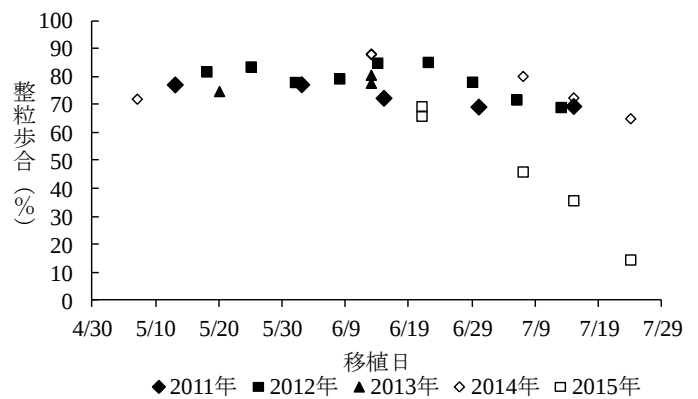


図2 移植日毎の玄米整粒歩合

注) 栽植密度は全て 18.5 株/m²

整粒歩合は穀粒判別器 RN-310 で測定

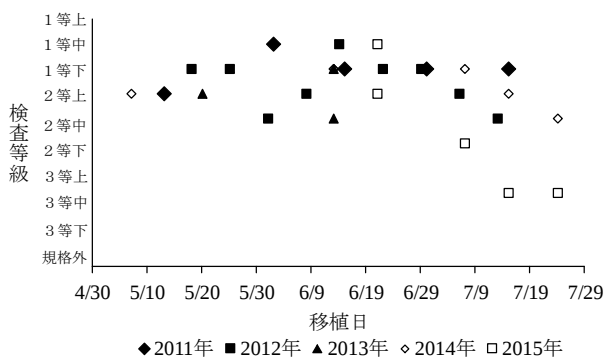


図3 移植日毎の検査等級

注) 栽植密度は全て 18.5 株/m²

検査等級は全農岡山による

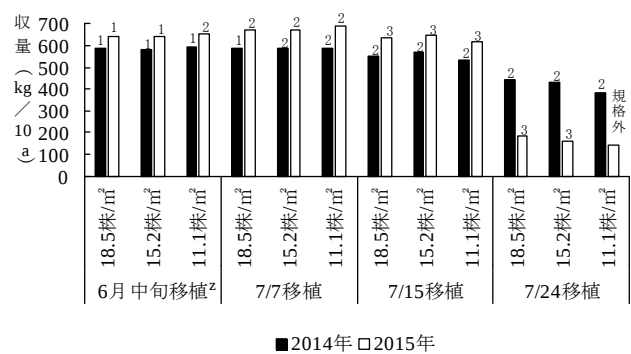


図4 移植日と栽植密度毎の収量と検査等級

注) 図中棒グラフ上の文字は検査等級を示す

² 2014年は6/13移植、2015年は6/21移植

[その他]

研究課題名：きぬむすめ、にこまるの高品質生産技術の確立と温暖化対応品種の選定

予算区分：県単（産学官連携推進事業）

研究期間：2012～2016年度

研究担当者：前田周平

関連情報等：1) [平成23年度試験研究主要成果、1-2](#)

2) [平成24年度試験研究主要成果、7-8](#)

3) [平成25年度試験研究主要成果、1-2](#)

4) [平成26年度試験研究主要成果、7-8](#)